

いろいろなことを教えてくれる子どもたち (六)

村石京子



ブランコ 二題

今月は子どもたちの大好きなブランコから、話題を二つばかりひろってみたいと思います。幼稚園が始まったばかりの四月、五月の頃はブランコはいつも満員でした。「乗ろうと思って誰もかわってくれない」とか、「先生、押してエ」とかいう声がよ

く聞こえてくるのもこの頃です。

「ブランコは代りばんに乗りましょうね」「よく止まってから降りるのよ」「ブランコの前を通ると危ないのよ。後から気をつけてまわっていらっしやい」などと毎日々々くりかえし言っています。それでも時々ブランコがぶつかったのと言って泣き顔で保育室にもどってくる子どももあれば、押してあげ

でも押してあげても、もっともつとせがむ子どももいて、腕がだるくなってしまうようなくりかえしです。ブランコはちよつと危なくても、なかなか順番がこななくても、子どもたちにとって思う存分こぐことで体に伝わってくる充実感や、その振幅に身をまかせてゆったりと過ごす一時の心地よさというものは、他の遊具では得られない大きな魅力ある存在なのでしょう。

そしていつも行列だったブランコが少し空く時期があります。それは子どもたちが、グループであそぶことの楽しさを知ったときです。例えば、砂場に思う存分水を注ぎながら協力してつくり上げていく川やダム工事であったり、高鬼やリレーなどが盛んになる頃であったりします。今までの二、三人であそんでいたブランコあそびと、みんなであそぶダイナミックな動きのあるあそび、つくりあげたり、移り変りの変化のあるあそびとは違った味わいがあります。仲間意識が育ってきて、友だちと動きをと

にしたいときは、ブランコは入園当初のにぎわいはかわって、しーんと静かに風にゆれていたりします。

けれど大勢のあそびを味わい得た子どもたちは、また安らぎを求めるかのようにブランコにもどってくるのです。今度はすいているブランコにゆったりと乗って、周囲の「かわってエ」という声を気にしなくても、思う存分あそべる時期が訪れるのです。

一学期の終り近いある日、その日は年長組だけが午後まで保育のある日でした。午前中にぎわっていた園庭も、年少、年中の組が家に帰り、年長組は二組がおべんとうで保育室に入っていると、先程とはうってかわった静かな昼さがりといった情景になっています。

おべんとうの早くすんだ五歳児が一人、二人庭に出てくると誰も乗っていないブランコのところへやって来ました。私は保育室で午前中の後片付けなどをしていると、急に明るい歌声がブランコの方から

聞こえてきました。あ、と聞いて聞いているとそれは最近若者に人気抜群のチェッカーズの「涙のリクエスト」でした。二連のブランコを合わせてこぎながら、二人で実を楽しそうにうたっているのです。

歌詞はよく聞いてみると、私もそうなのですが、この子たちも曲のはじめの部分、「なみだのリクエスト、さいごのリクエスト」というあたりしかはつきり知らないようで、後半のテンポが変わってからはララか何かでメロディだけうたっていました。ブランコのゆれに合わせて、自分たちの好きなうたを心ゆくまでうたっている。こんな楽しい光景を見ると、こちらの気持ちまで明るくなってきます。それは保育室で歌の指導をするときにはあまり出合うことが出来ない程、くったくの無い明るい歌声と表情でした。そしてリズムに合わせて、ブランコをこいでいます。それは教えて覚えたのではなく、子どもが自分で発見し、自分でその体感を楽しんでいるのでした。私は子どもは体を通して音楽を楽しむのだ

ということを改めて感じさせられ、ブランコには音楽に通じる味があるのだということを考えさせられた一時でした。

それから別の五歳児のクラスであったことです。それは梅雨明けの待たれる七月の初旬のことでした。

保育室にいた私を、二、三人の子どもたちが息せき切って呼びにきました。「ネ、ネ、すぐ来てちょうだい。くもよ、くもなの」と口々に言います。何かとても素晴らしいことを見つけた表情の子どもたち、私は何を発見したのかしら、大きくなくてもいてびっくりしているのかしらと思いつつ、みんなの呼ぶ方へ行きました。そこはブランコのところで、そこにも数人の子どもたちが待っています。「なあに？ どうしたの？」と問いかける私に、「いいから坐って、坐って」とブランコに坐らせ、「ほら、

見て！ まっすぐ見てね！」と言われて、ブランコに腰かけて見た真正面には、大きな大きな真夏の入道雲がむくむくとあったのです。「わあ、すごい！」「ネ！ すごいでしょう！ 私たちで見つけたのよ！」「もう夏になるのでしょうか。あれは夏の雲よね」と話しかけます。そして「ブランコをこぐと雲がぐうんと近くなったり、遠くに行ったりして面白いのよ」と教えてくれた子どももいました。早速やってみました。それは、昨日まで続いていた梅雨空を拭きさったかのような真青な空にもくもくと浮かび上った白い入道雲が、ブランコをこぎながら眺めると、わあと近づいたり、遠くへ行ったりします。「素敵！ すごいよね！」「すごいでしょう」教えてくれた子どもたちも、またブランコをこぎはじめました。あんまり楽しくて、私と子どもたちは暫く入道雲に見入りながら、ブランコをこぎ続けたものでした。

真夏が近づき、空に大きな入道雲が浮かぶのを見ると、私はいつもブランコに乗ってそれを見つけたあの子どもたちの新鮮な驚きと、喜びに輝やく表情を思い出し、そしてその喜びを私にも分けてくれようとしたあの日のことを楽しく思い出すのです。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

